

アクリル画における「絵肌」に関する一考察

桶田 洋明

(2006年10月18日 受理)

A Study of "Matière" in Acrylic Painting

OKEDA Hiroaki

要 約

アクリル絵の具を用いた写実的絵画に見られる絵肌の役割を、他の描画材による絵肌との比較や、アクリル絵の具の性質を研究した上で導き出していく。アクリルメディウムの量による違いによって見られる絵肌の変化や、アクリル絵の具に添加されたマチエール剤による違いによって見られる変化を、試作品を元に検証することでアクリル画ならではの絵肌を導き出す。ハッチングや染み込み、擦り込みといった方法を描写に取り入れて、それぞれの絵肌における特徴を挙げて他の描画材との相違点を考察していくことで、独自のマチエールと色調を表現することが可能となり、新しいアクリル絵の具による作品を生み出すことを助長する。

キーワード：絵肌，マチエール，絵画，アクリル絵の具，メディウム，油絵の具，描画法

I はじめに

本稿は、平成17年3月発行の鹿児島大学教育学部研究紀要第56巻⁽¹⁾、および平成18年3月発行の同研究紀要第57巻掲載⁽²⁾の拙稿に並行して研究したものであり、アクリル絵の具を用いた写実的絵画表現の絵肌における技法的特色を分析していくものである。

前研究では、油彩画に見られる特徴を詳細に考察した後、アクリル絵の具における表現方法との比較を具体的に述べた。その後、アクリル絵の具の特徴を生かした描画法をより具体的に考察していくことで、アクリル画による表現の多様性を理解することとなり、アクリル絵の具では不向きとされていた表現でも積極的に取り入れることが可能になり、より幅広い表現方法を見出すことができたと思われる。このようなアクリル画の描画法と密接な関係があるもののひとつに絵肌の選択が挙げられるであろう。色彩や構図、モチーフの選択、またそれらを表現する技法（描画法）等々、絵画を支える造形要素は多数存在するが、その中においても絵肌は特別な存在であると思われる。

画面全体を占める絵肌は、その作品の最上部にあたるため常に鑑賞者の目に留まり、そのタイプによって多くの雰囲気表現している。また、絵肌は描画材の違いによって異なる表情を醸し出す。例えば水彩画と油彩画とでは画面の厚み、平滑度、光沢度などは全く違うわけであるが、それらは絵肌の違いからによるものであるとも言える。したがって、アクリル画における絵肌の特色を考察することにより、他の描画材では表現できない独自の画面を導き出すための足掛かりとなると思われる。

そこで本研究では、絵画における絵肌の役割を描画材の違いを考察してから、アクリル画に適した絵肌を、試作を元に追求していくこととする。本研究により、水性色材であるアクリル絵の具を用いた表現の多様性を理解するとともに、アクリル絵の具ならではの絵肌の特徴を導き出すことで、独創性の高い表現を生み出すきっかけとなるはずである。

II 絵画における絵肌の関わり

1. 絵画と絵肌

絵肌という言葉は、マチエール (*matière* : 仏語) として使用されることが多く、また、広くは材料、材質の意味を持つため、英語ではマテリアル (*material*) を充てることが多い。美術における使用の場合、画面の肌の意味に用いられる。例えば、油彩画と水彩画では絵の表面の材質感が異なり、また、油彩画でもその描き方により、薄く絵の具を塗ってつるつるした感じになったり、厚く塗ってごつごつした感じになったりする。同じ厚く塗るのでも密度のあるものやその希薄な感じのものがあり、さらに同じ一枚の中でも部分的にいろいろ材質感の変化が示される。絵の具の種類や厚さ、展色剤・溶剤の種類や使い方、画布の性質、筆触等によって、画家各々の画面の肌になる。画家の気質や意思や技術によってその違いが生まれる⁽³⁾。つまり、それらは画家の美感と結びついている。ちなみに単なる「見かけ」を示すときは、テクスチア (*texture*) を用いる⁽⁴⁾。

以上のことをまとめると、絵画における絵肌を語る上で重要な要因となるものは、以下の2つに分類できる。

- ① 描画材との関わり
- ② 描画法との関わり

そこでまず、絵画と絵肌の結びつきを①、②の別に考察してみる。

2. 描画材との関わり

描画材は、絵画における絵肌を考察する上で大きな要因を占めている。本研究では、絵の具である色材の種類だけではなく、それらを薄める役割を果たす溶剤や、色材を支える支持体などが主な描画材となる。以下に各々について述べていく。

まず色材であるが、これらはさらに、顔料、展色剤の2項目に分類できる。前者の顔料については粒子の粗密の度合いによって絵肌の違いが生じてくる。一般的に日本画制作に用いる代表的な顔料である岩絵の具のほうが、他の洋画分野で使う顔料よりも粒子が大きいものを使用している。従って日本画作品の絵肌を観察すると、洋画分野の作品よりもざらざらとした層を見ることができる。一方、洋画分野で使用する顔料はかなり粒子が小さいため、展色剤と混ぜ合わせることでほぼ粒子の質感は確認できなくなる。従って絵肌を観察しても顔料そのものの物質感を感じられない。次に後者の展色剤であるが、顔料と展色剤を混ぜて描写し、乾燥する過程の差によって絵肌に違いが生じている。図1のように、油絵の具は乾性油を展色剤としているため、乾性油が酸化して、中に顔料を抱え込むようにして被膜を作りながら支持体に固定する。他の水性絵の具は樹脂や画材が水の中にコロイド状に溶けている。水が蒸発するとその中に溶けている展色剤（アクリル画：ポリマー樹脂、透明水彩画：アラビアゴム、日本画：膠）が顔料を支持体に固定する。また、水分が蒸発する分体積が減り、絵肌はマットになる。つまり、油彩画の絵肌は酸化した油で覆われるため滑らかでねっとりとした質感を持つ。対して他の水性絵の具は体積の減少により顔料の粒子の一部が絵肌そのものになるため、ざらざらとした絵肌を形成している。しかしアクリル画は、アクリル樹脂が持つ滑らかさによって、他の水性絵の具よりもざらざらとした質感は発生しない。

次に溶剤との関わりであるが、ここで取り上げる溶剤はいわゆる薄め剤のことを指す。従って油絵の具の溶剤は揮発性油で、他の水性画材はすべて水が溶剤に該当する。絵の具に溶剤を混ぜて薄めることは、顔料そのものの量は変わらないが展色剤の割合を小さくすることになる。つまり顔料の割合は大きくなるため、画面の表層に顔料がより表出することになる。ゆえに絵の具に添加する溶剤の量に比例して、画面の平滑度は小さくなるということが言える。

最後に支持体についても考察してみる。支持体は色材と密接な関係があるため、色材だけを取り上げて考察することは難しいが敢えて述べてみると、支持体の吸収度と、支持体の材質が持つ平滑度の2点が挙げられる。前者については、支持体の吸収度が高いことで展色剤そのものも吸収されるため、顔料の粒子がより浮き出すことになり、平滑度は減少する。これは油彩画にも当てはまることである。後者の支持体の平滑度は、使用されている材質によって大きな差が生じる。例えば、板に描かれた油彩画と麻布に描かれたそれとでは絵肌に大きな差が生じる。油彩画は比較的厚塗りをして描写していくため、支持体の凹凸はあまり関係がないと思われがちであるが、極端な厚塗りをしない限り上層まで支持体の凹凸は残っている。水性絵の具での描写に至っては、その影響はさらに顕著である。特に透明水彩画のような、色材の画面への吸収度が高い描画法を使うと、支持体そのものが絵肌として表出していることになる。つまり、吸収度が高い支持体による作品の絵肌は、支持体そのものの材質感になっているということが言える。

以上、色材の種類、溶剤、支持体の3点について述べてみたが、絵肌の物理的な粗さ、滑らかさは、3点の密接な関連から作られるということが理解できた。光沢度が高い展色剤を使用している絵の具は透明感が増し、より平滑な絵肌になり、物理的な平滑画面は光の乱反射が見られないため

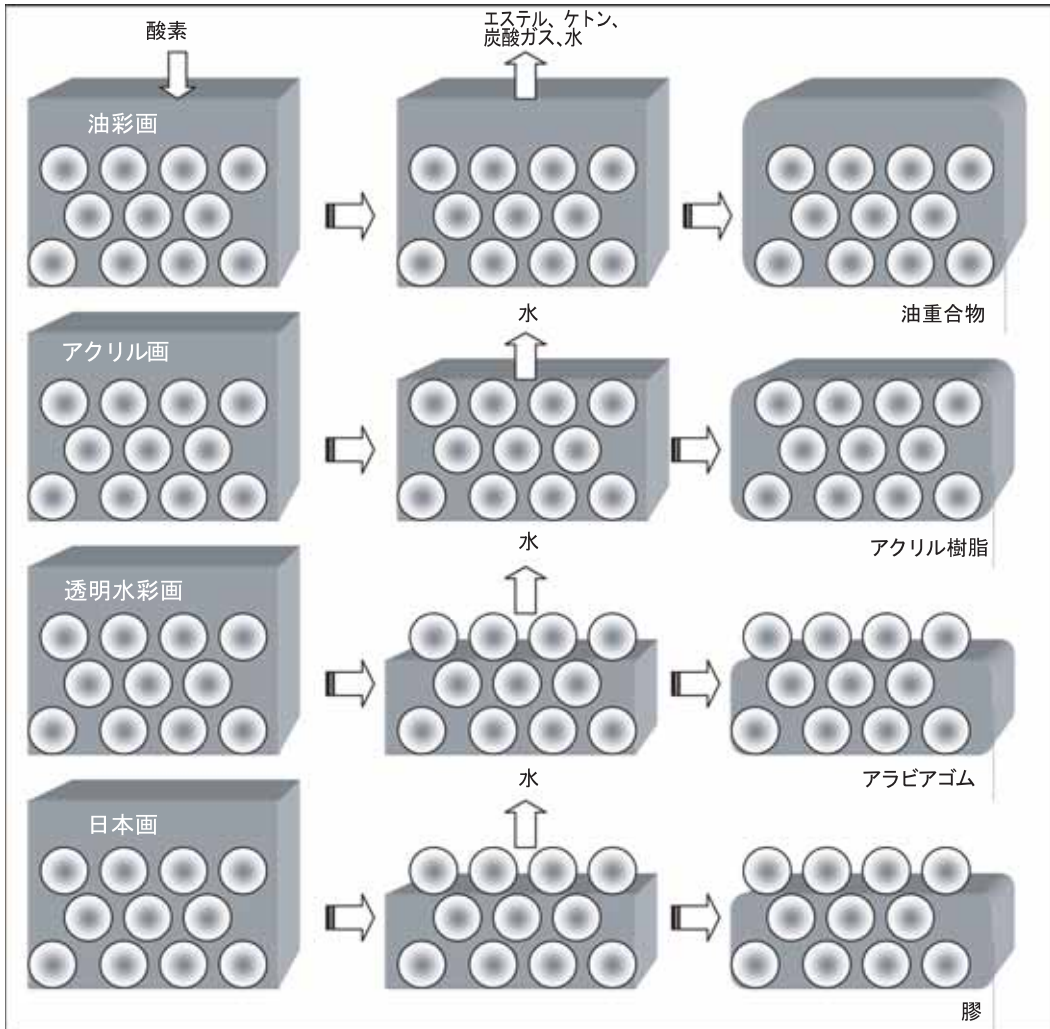


図1. 絵の具の乾燥の過程

鏡面のようなフラットさを印象づけることになる。水性絵の具に見られる顔料粒子の表出は、画面に規則的な凹凸を発生させて光の反射を抑えることで、画面が落ち着いたマットな質感を与えている。

3. 描画法との関わり

本節では、前節にて考察した描画材と絵肌との関わりをふまえて、描き方の違いによる絵肌の変化を検証していく。しかしながら、ひとつの色材における描画法だけでも数多く存在しているのが現状である。そこで、過去から現在にかけて、多くの色材に使われる描画法を以下に3つ挙げて考察していく。

- ① 透層技法
- ② プリマ技法
- ③ ハッチング技法

透層技法はグレーズ、グラッシのことであり、15世紀前半のフランドル派の画家たちが手法を確立したものである。従って油彩画黎明期の代表的技法であるとも言える。具体的には絵の具を半透明な薄い層で塗り重ねる技法であり、この技法は油彩画だけではなく、他の色材による制作でも使われているもののひとつである。いずれも顔料：展色剤：溶剤の比率を、通常の描写のときよりも展色剤と溶剤の比率を高めにして、透明度の高い絵の具を用いる。しかし絵の具の展色剤や、支持体の違いから異なる絵肌が生まれるのである。非吸収性、半吸収性下地を使用することが多い油彩画で透層を施した場合は、絵の具の下層への吸収はほとんど見られないため、重ねた分だけ半透明な層が連なることになり、画面に当たった光が複雑に透過することで透明感があり、深みのある繊細な色調が生まれる。よって、透層技法は油彩画の展色剤の性質を最大限に生かした描画法であるといえる。他の水性絵の具、特にアクリル画と日本画に関しては、展色剤の割合を上げて支持体の吸収性を抑えることで、油彩画ほどではないが透明感のある色調を得ることができる。透明水彩画の場合も、展色剤を追加させることで似たような効果は得られるが、一般的には展色剤の追加は行わず、溶剤（水）のみで透明度を増して描画することが多い。しかも支持体が紙であるため、絵の具の吸収力が強く再溶解もするため、他の水性絵の具とは若干異なる色調となる。

プリマ技法はアラプリマとも言い、油彩画の透層技法全盛の後、19世紀後半の印象派から一般化したものである。比較的不透明な絵の具を厚めにたっぷりと画面に置いていく技法であり、筆のタッチや絵の具の盛り上げなどを画面効果として生かす描画法である⁽⁵⁾。この描画法も透層技法同様に、アクリル画、日本画においても近い表現ができる。特にアクリル画は、絵の具メーカーにより盛り上げ用の添加剤が数多く商品化されており、それらを絵の具と混ぜて描くことで油絵的な表現

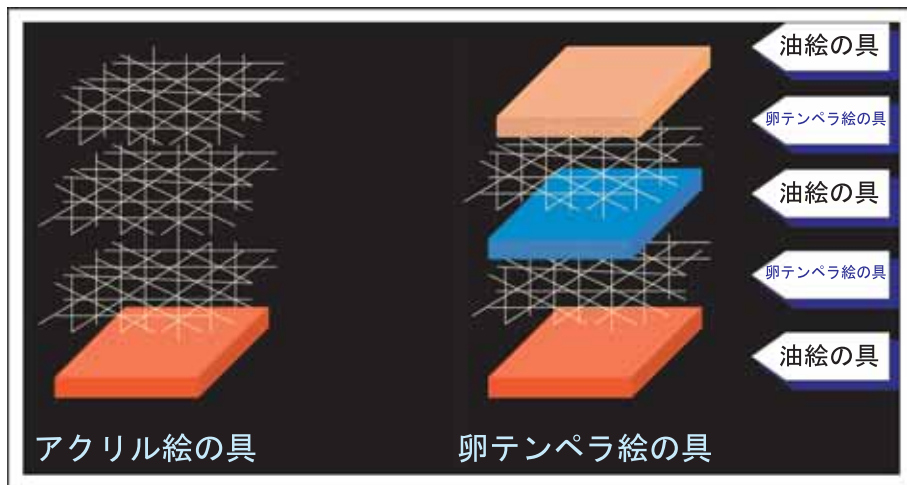


図2. アクリル画と卵テンペラ+油彩画のハッチング

が可能である。透明水彩絵の具はもともと透明度が高い絵の具であるため、この描画方法はあまり使うことはないが、絵の具の隠ぺい力、被覆力が高い不透明水彩絵の具を併用することで似たような表現ができる。

ハッチングは、西洋においては油彩画が登場する前、卵テンペラ画の代表的な技法である。線を他方向から重ねることで複雑で繊細な諧調表現を可能にしている。水性絵の具の仲間でもある卵テンペラ絵の具で諧調表現をするための代表的な技法であり、油彩画全盛になってからはほとんど使われなくなった。乾燥速度が遅い油絵の具は乾燥前に他の色調を混ぜてぼかすことができるため、時間がかかるハッチングは必要としなくなったのである。しかし、乾燥速度の速い水性絵の具では



図3. 学生作品
テンペラ・油絵の具



図4. 学生作品
アクリル

現在でも用いられる描画法である。ハッチングは現在、卵テンペラ絵の具と油絵の具の混合技法の際、よく使われているが、アクリル画においても使用すると効果的な諧調表現を得ることができる。図2のように、卵テンペラ、油彩の混合技法の場合は、卵テンペラ絵の具でハッチングをした後油絵の具で色調表現するという互層表現をするのが一般的であるが、アクリル画の場合はハッチング表現そのものを重層して深みを出す描画法が有効である(図3-5)。ハッチングによる絵肌は、重層された線の効果により織物のような規則的な凹凸が見られ、美しいマット表現を得ることができる。



図5. 図4作品部分

以上、透層、プリマ、ハッチングの3つの技法がもたらす絵肌について考察したが、絵の具の厚みや凹凸の関わりが絵肌のタイプを決定づけることが理解できる。その中でも、すべての描画法で効果的な表現が可能なアクリル画に絞り、次章で絵肌との関わりを詳細に検証していく。

Ⅲ アクリル画と絵肌との関わり

前章では、描画材の違いによる絵肌の変化について検証した。描画材の違いは展色剤の違いでもあり、それぞれの描画材による描画法によってさらに違いが見られた。そこで本章では、アクリル画における展色剤と絵肌との関わりを分析し、また描画法と深い関わりがある添加剤による絵肌の変化を検証していく。

1. 展色剤と絵肌との関わり

アクリル絵の具の展色剤であるアクリル合成樹脂は、一般的にはグロス（ポリマー）メディウムとして商品化されている。そこで本節では、アクリル絵の具におけるグロスメディウムが占める割合の差によって見られる絵肌の違いを検証していく。使用する描画材は下記の通りである。

顔 料：チタニウムホワイト、アイボリーブラック

展色剤：グロスメディウム

溶 剤：水

支持体：アクリル用キャンバスボードにアクリルジェッソ（白）

上記の描画材を用いて下記の通り展色剤の占める割合を変えて描画する。なお、描画法はプリマ技法とした。

- ① 顔料1 : グロスメディウム3 : 水 適量
- ② 顔料1 : グロスメディウム1 : 水 適量
- ③ 顔料3 : グロスメディウム1 : 水 適量
- ④ 顔料1 : グロスメディウム0 : 水 適量

以上の条件で、机上の球体をモチーフに表現したものが図6である。①メディウム3は最も光沢があり、絵の具の伸びもよく制作のしやすさも4点の中では一番という結果であった。描かれた球体の暗部がやや白く見えるのは、画面の光沢による光の反射である。②メディウム1も適度な光沢があり、アクリル絵の具らしい落ち着いた絵肌が得られている。しかし描写の際は、展色剤不足による絵の具の伸び不足が見られた。③メディウム3は、明らかに展色剤不足となっているため光沢もなく、顔料がメディウムに十分溶解されていないため、凹凸のある画面になっている。④メディウム0は、本来の制作では使わない調合だが、下地剤であるアクリルジェッソの吸収性を計る上でも実施した。その結果、厚塗りの箇所は予想通り描写後すぐに亀裂が見られ、さらに剥落が始まっている（図7）。しかし、比較的薄塗りの箇所である机上の影の部分等には亀裂、剥落は見受けられ



① 顔料 1
グロスメディウム 3



② 顔料 1
グロスメディウム 1



③ 顔料 3
グロスメディウム 1



④ 顔料 4
グロスメディウム 0

図6. 展色剤の割合と絵肌の関わり (学生による試作)

ない。この箇所は顔料が少ないため、下地のアクリルジェツに吸収されて画面に留まっていると思われる。つまり下地の吸収許容量を超えた箇所に亀裂が生じているということが言える。しかし亀裂が生じていない箇所も耐久性に関しては高いとは言えず、言うまでもなく勧められない描画法である。結論としては、最も固着性、耐久性に優れていて光沢が強いのは①である。しかし、アクリル画のマットな絵肌は②に見られる。②は固着力がやや少ないので①

②の間が適当と思われる。③は凹凸の絵肌を得ることに成功したが固着力に難がある。岩絵の具と違い、顔料そのもので凹凸を表出させることは限界がある。そこでアクリル画では顔料以外の添加物によって絵肌の質を調節する。そのための検証を次節で行っていく。

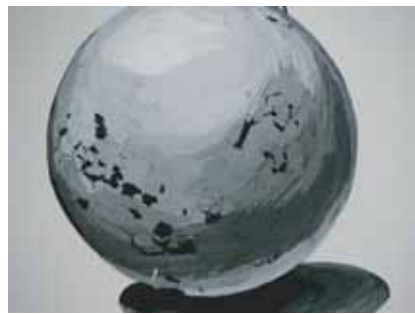


図7. 図6④部分

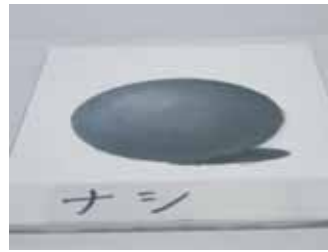
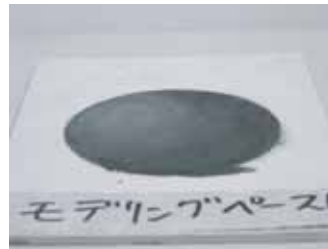
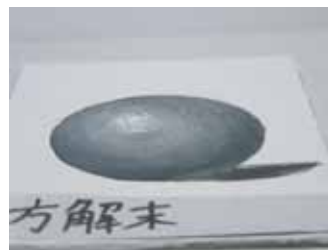
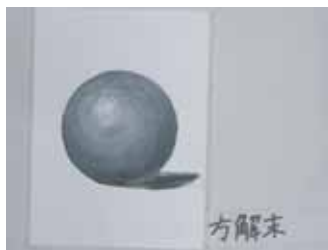


図8. 添加物の違いと絵肌の
関わり (学生による試
作) 1-5

1. 絵の具のみ



2. 絵の具+モデリングペースト



3. 絵の具+方解末



4. 絵の具+ジェルメディウム



5. 絵の具+マットメディウム

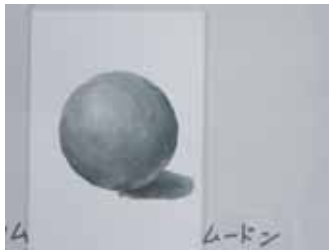


図9. 添加物の違いと絵肌の関わり (学生による試作) 6-10

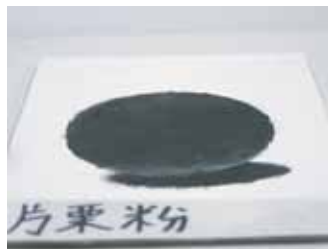
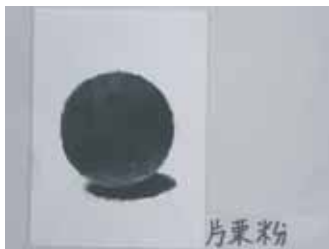
6. 絵の具+ムードン



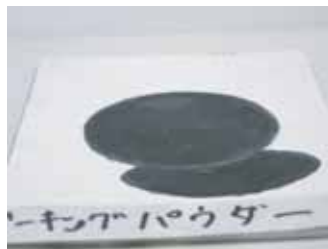
7. 絵の具+石膏



8. 絵の具+火山灰



9. 絵の具+片栗粉



10. 絵の具+ベーキングパウダー

2. 添加物と絵肌との関わり

本節では、アクリル絵の具に混入した添加物の違いにより見られる絵肌について考察していく。添加物は粉末状のものであれば何でも当てはまるが、ここではアクリルメディウムとして市販されているものを中心に選択して検証する。なお、顔料からの調合は行わず、市販チューブ型アクリル絵の具を使用する。従って展色剤は添加しない。その他使用する描画材、その体積比は下記の通りである。

絵の具：チタニウムホワイト、 マースブラック 1
 添加物：下記の通り 1
 溶 剤：水 適量
 支持体：アクリル用キャンバスボードにアクリルジェッソ（白）

上記の描画材を用いて下記の添加物を混入して描画する。なお、描画法はプリマ技法とした。

- | | |
|-------------|-------------|
| ① 添加物なし | ⑥ ムードン |
| ② モデリングペースト | ⑦ 石膏 |
| ③ 方解末 | ⑧ 火山灰 |
| ④ ジェルメディウム | ⑨ 片栗粉 |
| ⑤ マットメディウム | ⑩ ベーキングパウダー |

以上の条件で、机上の球体をモチーフに表現したものが図8，9であり、右側の写真はそれぞれを斜め上から撮影し、絵肌の違いや光沢の度合いを表現している。光沢が強いものは順に④，①，⑤である。①は絵の具のみであるため言うまでもないが、④，⑤はアクリル合成樹脂が主成分でありつや出し剤でもあるため①よりも光沢がある。⑤はつや消し目的のメディウムであるが落ち着いた光沢が見られた。他の添加物は、②を除いて粉末状のものであるため、絵の具の展色剤が占める比率が下がることもあり、つや消しの絵肌になる。最も凹凸が見られたのが⑧の火山灰であるが、粉末の粒子自体の大きさによるものと思われる。

次に、描画した各々の試作品に以下絵の具で描画を施す。

絵の具1 ： 水 10 (図10) 画面全体に塗布
 絵の具1 ： 水 4 (図11) 画面全体に塗布 指触乾燥後、濡れた布でふき取り

絵の具の配合 チタニウムホワイト1 ： マースブラック 1

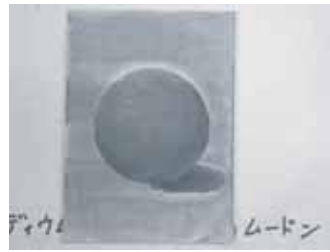
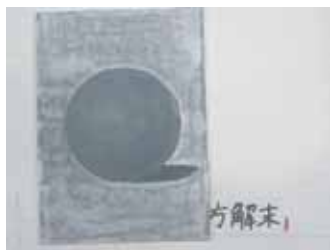
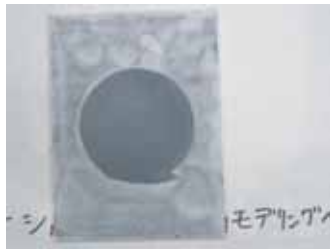


図10. 図8. 9に
絵の具1 : 水10を塗布



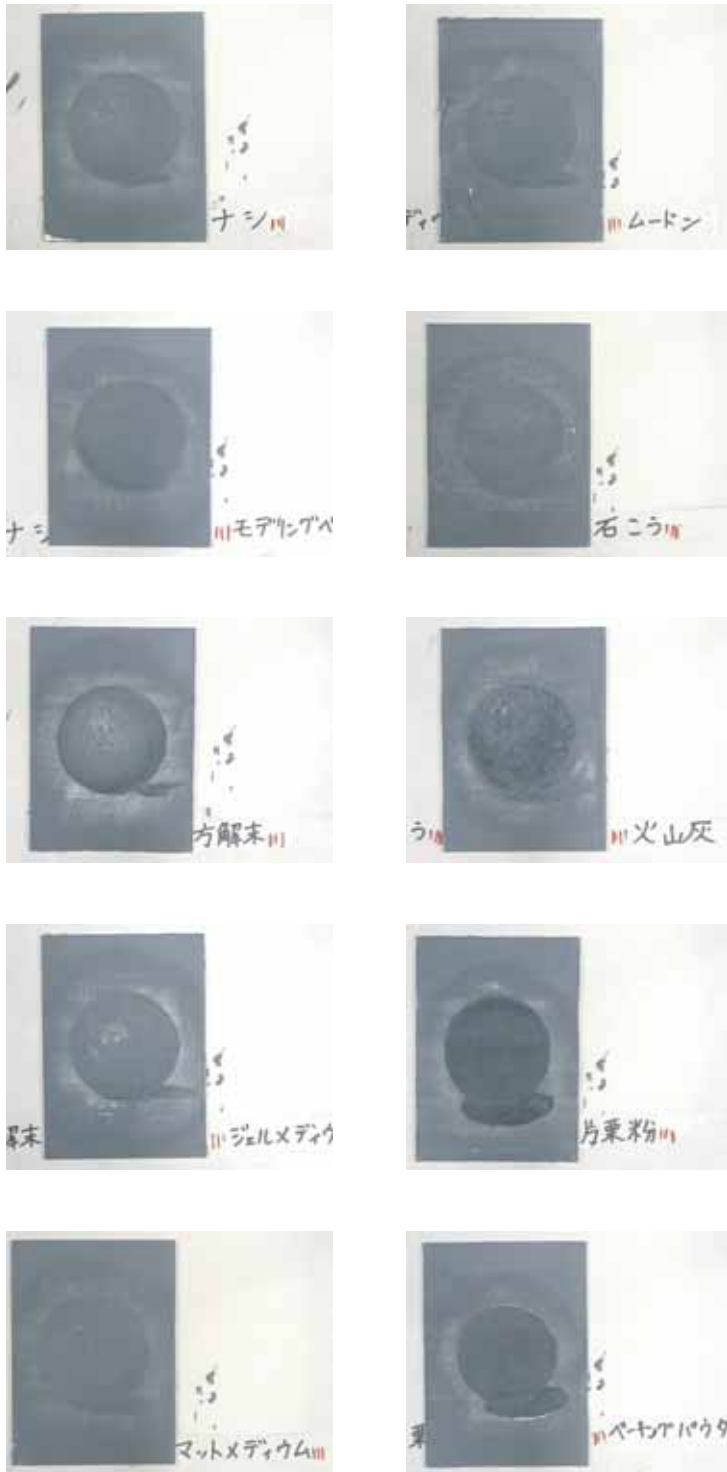


図11. 図8. 9に
絵の具1：水4を塗布
後、ふき取り

図10の絵の具は透明度が高くなるため、透層技法と同様の効果が得られる。ただし、展色剤の追加は行われていないため、つやの無い画面となる。図11は不透明な絵の具を用いることになるため、スキャンブル的描画法を施している。指触乾燥後、濡れた布によってふき取ることで画面の凸部のみがふき取られ、下層の色面が表出する。この技法はアクリル画において最も効果を発揮するものである⁶⁾。またこの描画法を行うと、展色剤の比率が低い絵の具の画面(①④⑤以外)は吸収力が高いため、塗布した上層の絵の具が画面に深く吸収されており、ふき取りによる作業をしてもあまり上層の絵の具は取ることができないことが理解できる。特に②モデリングペースト、⑧火山灰、⑨片栗粉の3種は吸収力が強いいため、上層の絵の具の色調が下層の絵の具に染み込んで定着している状態であった。

以上、2種類の試作による結果から添加物と絵肌の関わりをまとめてみる。まず平滑で光沢な絵肌を作るためには、やや多めの展色剤(顔料1:展色剤2以上)を必ず混入し、筆致を抑えた描写を施す。なお下地もできるだけ平滑にしておく必要がある。平滑だがマットな絵肌を作るためには、固着に必要な最小限の展色剤(顔料1:展色剤1程度)を混入し、筆致を抑えた描写を施す。凹凸があって光沢な絵肌を作るためには、やや多めの展色剤(顔料1:展色剤3以上)とマチエール添加剤(モデリングペースト等)を混入し、描写を施す。その後、ふき取り等による描写が有効である。凹凸があってマットな絵肌を作るためには、固着に必要な最小限の展色剤(顔料1:展色剤2程度)を混入し、描写を施す。以上4種の絵肌に分類した際の描画法を表記したが、支持体や添加物の質や粗密さによって微調節は必要である。

IV おわりに

絵画の絵肌を観察すると、その作品の描画剤や描画法が理解できるだけでなく、作品の主題、コンセプトまでもが読み取れる。絵肌が作品の方向性を左右するといっても過言ではない。本研究にて、描画剤や描画法と絵肌との関係はある程度の結論を得た。特にアクリル絵の具を用いた際の絵肌の作り方は、詳細に分析ができたと思われる。絵の具メーカーは、アクリル絵の具で油彩画の表現方法が使えるように絵の具そのものや添加物、各種メディウム類の開発を日々行なっている。そのことはアクリル絵の具で油彩画のような作品を描きたいという制作者側の要望が強いという表れでもあり、また現在のアクリル絵の具だけでは油絵の具を使った時の表現ができないということも伝えていると言える。ゆえにアクリル画制作において、絵の具以外の添加物の役割は大きいと言える。さらにアクリル絵の具の特性を生かした描画法の開発は、上述の目的を達成する上でも制作者として引き続き研究を継続する必要がある。なお、本研究では、作品のコンセプトや制作者の感情等と絵肌との関わりはあまり多くを語っていない。これらの研究においても並行して行い、アクリル絵の具を中心に、より新しい独創性の高い描画法の研究を継続して進めていくこととする。

註、および引用文献

- (1) 拙稿、『アクリル絵の具による描画法に関する一考察』、鹿児島大学教育学部研究紀要、人文・社会科学編、第56巻、2005、pp.89-102、参照
 - (2) 拙稿、『アクリル絵の具による描画法に関する一考察Ⅱ』、鹿児島大学教育学部研究紀要、人文・社会科学編、第57巻、2006、pp.71-84、参照
 - (3) 今林篤男、山田智三郎編、『西洋美術辞典』、東京堂出版、1954、p.592参照
 - (4) 森田恒之監修、『絵画表現のしくみ』、美術出版社、2000、p.198参照
 - (5) 森田、前掲書、p.188参照
 - (6) 拙稿、前掲書『アクリル絵の具による描画法に関する一考察』、参照
- ※写真はすべて著者撮影